

# 第9回映像ゼミナール/2010 夏

## 荒野のマント

2010年7月2日(金曜日)/17時～18時30分

会場: 上智大学2号館地下2階AV1教室 解説: 眞鍋正紀(本学非常勤講師)



ドイツ版の西部劇?ゲイのインディアン?アナクロニズム?この作品を見た人の大半は、そんな不協和音の連続に目を覆って不快感をあらわにするか、クスクスと、あるいは腹を抱えて笑うしかないでしょう。大衆の嗜好に迎合せず、商業主義に背を向けることを誇る「芸術的な」映画からはおよそほど遠い、ドイツでの観客動員数を更新した大人気のハチャメチャなコメディを、今回の映像ゼミでは紹介します。「大人気だって?それでは日本でも、あるいはそもそも世界でだって話題になったのでは…。でも聞いたことがない。」それも無理はありません。ドイツ語圏で爆発的な人気を博している、インターナショナルなマーケットからは完全に無視されるB級作品が数多くあるのですから。移民キャラクター二人を主人公とする『エルカンとシュテファン』(2001)、『Uボート』(1981)のパロディ作品『U900』(2008)、あるいはアニメ作品『ヴェルナー』(最新作は2010年夏公開の『ヴェルナー アイスコールド』)シリーズ然り。これらの人気作品は、ドイツ語圏のテレビ放送ですでに大きなファン集団を獲得しているシリーズもののスピノフ映画であり、すなわち「ザ・ムービー」形式の作品群です。こうした作品の制作資金は、もっぱら国内市場から得られる興行利益から回収されており、また海外市場への展開が構想段階からほとんど念頭に置かれていないため、国外(つまり他者)からの評価を無視して制作されています。そこで描かれる内容は、前提とされている(ドイツ語圏の、あるいはさまざまな社会層やグループの)文化コードや共通経験を共有しない者の目には、しばしば悪趣味でくだらないものに映っても当然です。しかし、だからといって無視してしまうにはもったいないほどのエネルギー、すなわち雑多な文化的・社会的要素がごった煮にされたときに立ち現れてくる迫力を、この『マントの靴』(2001)は感じさせてくれます。インディアンを主人公としたカール・マイの西部劇童話(『ヴィネトゥの冒険』)へのオマージュ、ゲイ・コミュニティへの眼差し、そして軽快なテンポのギャグとコントの連続を、監督・主演のミヒャエル・ブリー・ヘルビヒが丁寧に組み立てて提示しているからです。

他者の視線を想定して作られていないために、なかなか理解し難い(異文化圏の)ドメスティックなB級作品。それを手放してくだらない、と切り捨ててしまうのは浅はかでしょう。われわれは、そこで剥き出しの他者性と向き合っているのですから。なぜ分からないのか、笑えないのか。内輪ネタが理解できず除け者にされたような気分、そこに違和感を覚え、意味の空虚を感じる。そんな他者の立場に置かれている自分を、笑いながら、あるいは面白くないなあ、分からないなあ、と思いながら、意識してみてほしいと思います。

**【入場無料】**

**お問い合わせ**

上智大学ヨーロッパ研究所

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1, Tel/Fax03-3238-3902

Einladung zum

# Film-Seminar

2010/ Sommer

mit Vorführung

## DER SCHUH DES MANITU



Zeit: 02. Juli 2010 (Freitag), 17:00 - 18:30

Ort: Sophia-Universität

Raum: Gebäude 2, 2. EG, AV1

Mit herzlichen Grüßen  
Prof. Susumu Koizumi  
Prof. Reiko Kitajima

Europa-Institut: Chiyoda-ku, Kioi-cho 7-1, Tokyo/ Tel. 03-3238-3902

**Eintritt frei**